

# スポーツ選手の一生涯

1190403 阿部沙紀

高知工科大学 経済・マネジメント学群

## 第1章 はじめに

### 1-1 目的

本研究の目的は「特定のプロスポーツ選手について、彼の成功だけでなく失敗をも含めて詳細に検討することで、競技者が生涯を通じてスポーツとどのように向き合うかを検討すること」である。

私自身、小学校から現在まで15年間バレーボールを続け、これまでは部活動としてバレーボールと向き合い、チームメイトと協力しながら、試合で勝つことを目標に取り組んできた。しかし、来年からは社会人として、これまでとは異なる状況でバレーボールと向き合うことになる。プロスポーツ選手であっても現役を引退してからの人生の方が長く、全ての人が引退後も充実した人生を過ごせるとは限らない。したがって、社会に出てから、あるいは引退して以降の人生を豊かなものとする上で、当該スポーツとどう向き合うか（現役を引退した後も含めて）は競技者にとって重要である。

### 1-2 背景

本研究では、具体的なケースとして、元プロ野球選手の清原和博選手を取り上げ、彼の引退後の道のりも含めて、詳細に検討する。清原は甲子園通算本塁打を13本放っており、これは歴代1位の大記録である(2位は6本)。また、プロ入団1年目から西武ライオンズで4番を任され、チームの日本シリーズ優勝に貢献した。21年連続でシーズン2桁本塁打を打った記録はプロ入団一年目からの記録としては歴代1位である。現役時代は素晴らしい活躍が続けたが、ケガなどの影響で思い通りのプレーができず、2008年に引退するに至った。引退後は野球解説やバラエティー番組などで活躍していたが、2016年に覚せい剤取締法違反で逮捕され、現在は病院に通いながら薬物治療をしている。プロスポーツの世界に身を置く競技者の中でも、清原のように現役時代に華々しく活躍したうえに、後に多くの挫折を経験した選手は多くない。また、現役引退後は成功だけでなく、犯罪に手を染めるといった転

落も経験している。

## 第2章 研究方法

本研究では、清原について、公表されている文献、記事、映像のアーカイブス等に焦点を当て、清原の幼少期から現在までを検討する。その際に、野球に対する才能とその開花の軌跡だけでなく、現役引退後の野球との関係性や、薬物の問題など、ネガティブな面にも焦点を当てる。

## 第3章 研究課題

研究課題は以下の2点である。

- 1) なぜ野球界のスターだった清原はその後転落したのか
- 2) なぜ選手としての実績がその後の人生にマイナスの影響を与えたのか

この2点を明らかにすることによって、現役はもとより引退後に競技者がスポーツとどう向き合っていくべきかを検討する。

## 第4章 清原和博選手について

### 4-1 幼少期～中学校時代

清原は1967年に大阪府岸和田市に生まれ、現在(2019年)は51歳である。実家は家電店を経営しており、父(阪神ファン)以外の家族は巨人ファンで、その影響で清原も巨人ファンであった。幼少期の清原は、身体が大きく、力も強く、ガキ大将のような存在であった。1974年に岸和田市八木南小学校に入学し、運動に関しては学校で一番であったが、自分の実力は自分がある外の世界ではどれくらいなのかを知りたくなり、小学3年生の時に、岸和田リトルリーグの入団テストを受けることにした(清原和博,2018)。入団テストは4.5年生も受けていたが、他の子を圧倒する成績で、小学生の頃から身体能力の高さは他を圧倒していた。小学4年生の秋からレギュラーになり、小学5年生の時はエースで4番として活躍し、小学6年生の時には完全試合を達成した。1980年に岸和

田市立久米田中学校に進学し、岸和田シニアリーグに移る。中学校もエースで4番を任されていた。中学2年生の時はキャプテンとして関西シニアで優勝し、中学3年生の時には全国大会で準優勝した(清原和博,2009)。

大阪の岸和田市で育った清原は、岸和田「だんじり祭り」で正々堂々と命を懸けている、かっこよくて、男らしい大人を見て育った(清原和博,2009)。幼少期にテレビで観ていた巨人の選手たちは清原にとって、格好良さや男らしさを持つ大人の代表であったと推察される。清原は当時、巨人で活躍していた王貞治に憧れを抱いたが、王が量産するホームランは清原にとって「男らしさ」を象徴するものであったと考えられる。

## 4-2 高校時代

中学3年の清原には約30校の高校からスカウトが来たが、彼が最終的に選んだのはPL学園であった。母の地元である天理高校とPL学園のどちらに行くか悩んでいたが、少数精鋭のPL学園では学年に関係なく、同じメニューの練習ができることが決め手となった(清原和博,2018)。中学までは4番でエースとして活躍していたが、「桑田のピッチングを見た瞬間に、甘い幻想は消し飛んだ。こいつには勝てない。」(清原和博,2009)と考え、バッティングに専念することとし、ピッチャーは諦めた。

PL学園の寮生活は大変厳しく、清原は寮生活を振り返って、「大人になってから、ああいう経験が社会で役に立ったという人もいるかもしれませんが、僕は二度と戻りたくないです。自分では何もできず、自由がない。留置所もそうでしたけど、どちらも二度と嫌ですね。」(清原和博,2018)と述べている。PL学園では寮生活に加え、先輩後輩の関係も厳しかったため、選手たちは練習の辛さはあまり感じる事がなく、野球に打ち込めるメンタルの強さが養われていった。これがPL学園の強さでもあった。

入学から3ヶ月後に甲子園の大阪地区予選が始まり、清原は4番、ファーストに抜擢された。伝統あるPL学園で、入学してすぐの1年生が4番に抜擢されるのは初めての出来事であった。同級生の桑田も甲子園地区予選の第4回戦で先発し、2安打に抑える完投勝利をあげた。これにより控え選手だった桑田は、その試合から事実上のエースになった。そし

て、伝統あるPL学園で清原は1年生から4番に座り、エース桑田と共に初めての夏の甲子園で優勝を果たし、K・K(桑田・清原)コンビとして一躍有名になった。このように日本中から注目されるようになったが、それゆえ勝利に対するプレッシャーは大きくなり、また相手校からのマークも厳しくなり、徹底したインコース攻めをされた。結果として2年生の春の選抜大会・夏の甲子園では準優勝におわる(清原和博,2009)。3年生になった時の心境について、清原は「僕とはにかく『ここ』という場面で打てる打者になろうと思いました。」(清原和博,2018)と述べている。清原は、勝負所で打てる打者になるために、毎日必死に練習に取り組んでいたが、春の選抜大会では、伊野商業高校(高知)に準決勝で敗れ、ベスト4に終わってしまう。この試合で清原は3三振1四球と振るわず、これについて「本当に悔しかったです。自分が最上級生で4番を打っているのに3三振だなんて…。また僕は大事なところで何もできなかったわけですから…。」(清原和博,2018)と語っている。この悔しさを晴らすために、夏の決勝戦まで毎日300スイングすると決め、この日から夏の甲子園まで毎日続けた。当時について清原は「あの夏の甲子園までの四ヶ月の記憶は、あの後も僕の中にずっと残っていて、僕にとって、それだけ甲子園は大きなものなんです。」(文藝春秋,清原和博 独占手記,p.141)と述べている。この4ヶ月は清原の33年間の野球人生の中でターニング・ポイントであり、最後の夏の甲子園に掛ける思いが大変強かったことがうかがえる。そして最後の夏の甲子園、準々決勝の高知商業戦では、その練習の成果が実り、素晴らしいホームランを放っている。清原はこの時の気持ちを「少年時代から引退するまでに打ち続けた何百本のホームランの中でも、最も記憶に残るホームランだった。」(清原和博,2009)と述べている。続く準決勝でも2本のホームランを打ち、決勝戦に勝ち進んだ。決勝戦では、相手にリードされ、追いかける場面で2度もホームランを打って大活躍し、その試合は不調であったエースの桑田を鼓舞した。そして最後は松山(当時のキャプテン)の一振りで優勝を決めた。

高校時代の清原は、天性の才能に加え、厳しい練習に耐えることでプレーヤーとしての自信を高め、またこの自信は試合結果によってさらに増幅されていった。しかし、この実践重視の思考は、野球への理論的接近といったプロセスを軽視

することに繋がった可能性がある。

### 4-3 K・K ドラフト事件

K・K(桑田・清原)ドラフト事件とは、1985年11月20日に行われたドラフト会議での騒動である。清原は幼いころから巨人に入団することを目標にしており、当時巨人の監督だった王貞治監督(当時)もドラフト前日に「1位は清原でいく」と報道陣に明言していた。一方、桑田も早稲田大学への進学を表明していたため、誰もが巨人の1位指名は、清原だろうと予想していた。しかし、ふたを開けると巨人は清原ではなく、桑田を1位で単独指名して交渉権を獲得した。一方清原は6球団から1位指名を受け、抽選の結果西武ライオンズが交渉権を獲得した(日刊ゲンダイ,2016)。このドラフト会議について、巨人と桑田の間で密約があったのではないかという報道もあったが、定かではない。だが、K・Kドラフト事件で清原選手が負ってしまった心の傷はとても深いことが以下から分かる。

「不思議だったのは、甲子園の決勝戦や、プロデビューやプロ初ホームランや、引退などいろいろなことの日付をほとんど忘れてしまっていた中で、一つだけ、はっきりと覚えていた日がありました。それが1985年11月20日でした。あのドラフトの日だけは忘れていなかったんです…。」(清原和博,2018)

「あのドラフトの後から僕はずっと巨人に対しても、あの王さんに対しても、裏切られたという気持ちを抱えながら野球をやっていたと思います。」(清原和博,2018)

また、清原の性格について母親の弘子さんは「あの子は信じるまでに時間がかかるが、信じてしまったら、絶対に裏切らない子なのです」(清原和博,2009)と語っている。

清原は両親と一緒に、巨人のスカウトと監督に何度も会っており、巨人は自分を一位指名してくれると信じていた。さらに桑田とは互いの今後について、「清原はプロ野球選手に、また桑田は大学に進学する」と確認しており、彼はこれを疑うことなく信じていた。しかし、ドラフト会議では、憧れの巨人と3年間共に戦ってきた桑田の両方に裏切られた形になった。(清原和博,2018)

清原にとって桑田は、3年間苦楽を共にしたとても特別な存在であり、信頼し認めていたからこそ、裏切られた際のシ

ョックは大きかったはずである。また、憧れの巨人に裏切られたことにより、巨人に対する思いはこの出来事をきっかけに変わってしまったと考えられる。巨人と桑田は、清原にとってもはや「男らしい大人」ではなくなってしまったのである。

### 4-4 西武ライオンズ時代

清原は1986年に西武に入団し、開幕2戦目でプロ初打点・初安打・初本塁打を放ち、華々しいデビューを飾った。また、高卒1年目のルーキーながら、常勝西武ライオンズの4番を任され、126試合に出場し、123安打・打率.304・31本塁打・78打点の驚異的な成績で、その年はチームも日本シリーズ優勝を果たした。西武に在籍した11年間で8度のリーグ優勝、6度の日本シリーズ優勝にも貢献した。このように西武の黄金時代を作った清原だったが、プロ入り10年目でFA権を取得したことで、「巨人で野球がしたい」という昔の夢が蘇ることになる(清原和博,2009)。

この時の心情について清原は「常勝西武のバッテリーとしてのポジションには、もちろん何の不满も感じていなかった。僕は恵まれていた。いや、むしろ恵まれ過ぎていた。そのことが僕の心に一抹の焦りを生んでいた。このままの自分でいいのだろうか。そして、自分の夢を思い出したのだ。」(清原和博,2009)と述べている。

1996年にFA宣言をし、西武は破格の条件で清原を熱心に引き留めようとしたが、清原の中で「新しい球団に移籍することは、一から自分を鍛え直す最良の方法だ。」(清原和博,2009)との思いが強くなり、巨人か阪神のどちらかに移籍することを決めた。阪神の吉田義男監督(当時)は「縦縞のユニフォームを横縞に変えてでも」と熱心に誘い、年棒も巨人の約3倍、10年の長期契約、引退後の保証付きという条件を提示した。それに対して、巨人の態度はこれとは対照的なものであった。この時の巨人とのやり取りについて、清原本人は、「チーム内の年棒での序列などの話をし、『この条件しか出せない』と言ってきました。なぜ僕が欲しいかとかそういうことはなく、来るなら来れば、という感じを受けたんです。」(清原和博,2018)と述べている。この時、11年前のドラフトの件についても清原の中では整理がついておらず、巨人に対して謝罪を求めたが、取り合ってもらえず、結局謝罪の言葉は

なかった。この巨人の態度や阪神からの熱烈な誘いで、清原の心は阪神に傾いていた。しかし母親からの言葉で決心が揺らぐことになる。それは「あんたの元々の夢は何なの。昔から、巨人に行きたかったんやないの。それを巨人の対応が悪かったのどうのこうのという些細なことで、引っ繰り返してもいいの？あんたの夢はそんなに小さいものだったの？」(清原和博,2009)というものであった。

清原は巨人というチームに翻弄され、何度も裏切られ失望したが、それ以上に憧れが強く、自分の夢を大事にしたいという思いが大きかった。また、長嶋監督(当時)からも「何も考えずに僕の胸に飛び込んできてほしい」と、永久欠番の3番を用意され、その気持ちに感動し、最終的に巨人への移籍を決めた。

清原は西武で華々しい活躍をし、チームから求められる存在だった。ホームランも量産し、ファンにも愛されていたが、清原は幼い頃にテレビで観ていた、巨人の大歓声に包まれながらプレーすることへの憧れを捨てきれなかった。結局西武でどんなに活躍しても、清原の心は満たされず、最終的に誘われるままに巨人への移籍を決めたと考えられる。しかし、先に述べたように、当時の巨人は果たして「男らしい大人」として振る舞っていたのだろうか。このことは、後々清原を苦しめることになる。

## 4-5 巨人時代

1997年に巨人へ移籍後は、一から出直すために背番号5番をつけた。開幕から4番を任せられ、開幕3試合目に移籍第一号となる本塁打を放ったが、その後は三振が多く、当時のリーグ新記録(152三振)をつくった。また、チームもBクラス(4位)に低迷し、その責任は清原に重くのしかかった。巨人1年目の成績は130試合に出場し、115安打・打率.249・23本塁打・95打点で決して悪い成績ではなかったが、清原に対する期待はとてもし大きかったがゆえに、応援のボイコットをされる時もあった。巨人に移籍するまでは、周りから期待され、応援されることが一番の力になっていたが、巨人の野球に対する考え方の違いに戸惑うことが多かった。また、試合に負けた時にはマスコミから容赦なく個人攻撃をされ、それがプレッシャーとなり結果が出ず、期待に応えられない場面が多くなっていった(清原和博,2018)。それにより、今まではチー

ムの勝利を最優先にしてプレーしてきたが、その考え方も変わってしまったことが以下からうかがえる。

「ジャイアンツに入ってからは何のために野球をやるのか、そういう根本的なものが少しずつ変わっていったような気がします。最終的にはチームの勝利というものが最優先で、そういうバッティングをして自分を納得させられた部分があったんですが、ジャイアンツではそうでなくなっていったのかもしれない。周りに自分を認めさせるため。誰にも文句を言わせないため。そういうことのためにバットをふるようになっていったのかな。」(清原和博,2018)

また、この頃から期待に応えなければならないといった重圧により「グリーンー」という興奮剤を使い、パフォーマンスを上げようとした。

その後は度重なる故障でなかなか調子が上がらなかったが、5年契約の最終年(2001年)は134試合に出場し、139安打・打率.298・29本塁打・121打点(自身初の100打点越えて自己最高)の好成績を残し4年契約を得た。しかし、その翌年も故障により戦線を離脱し、試合に出場することができず、成績は低迷した。2004年に堀内監督(当時)になってからは試合に出場する機会が減り、4年契約の3年目(2004年)のシーズン終了後に長嶋元監督(当時)から「来季の巨人軍に君の居場所はない」と告げられる(清原和博,2018)。この当時、長嶋は球団の関係者ではなかったため、清原としては、球団の関係者でない人になぜそのような重要なことを伝えられるのかに納得がいかず、球団本部に直談判した。結局、球団の面子を保つために、一選手の立場で球団に直談判に及んだ越権行為として清原は謝罪会見を行い、「泥水を飲む覚悟でやります」と口にした(清原和博,2009)。清原選手に対する巨人の対応は、結果がすべてであるプロの世界とはいえ、清原にとっては冷酷なものであった。

覚悟を決めて臨んだ最後の1年は、開幕から4番を打って滑り出しは良かったが、夏前に膝を痛め、出場選手登録を抹消された。その直後に球団に呼び出され、戦力外通告を受けて巨人を退団し、自由契約となった。その期間中にオリックスパファローズの仰木監督(当時)から電話があり、「お前の最後の花道を俺が作ってやる。だから大阪に戻ってこい」と説得され、オリックス入団を決意した。(清原和博,2018)

清原が憧れ続けた巨人というチームは、幼い頃に思い描い

ていたようなチームではなかったのではないだろうか。K・Kドラフト事件や、FA 権を行使して巨人に移籍する時や解雇通告された時など、清原に対する巨人の態度はとてども冷酷なものであった。それでも清原が「巨人に入りたい」「巨人で現役を終えたい」とこだわっていたのは、幼い頃から抱いている巨人に対する憧れの気持ちが心の中にずっとあったからだろう。何度巨人に裏切られ、挫折をしても、憧れの巨人で活躍することで、ファンに応援され、求められることが清原の原動力になっていた。しかし、清原の一種恋愛にも似た巨人への想いは、巨人というチームには届くことはなかった。

#### 4-6 オリックスバファローズ時代

2006年にオリックスに移籍後は、故障でなかなか試合に出られなかったが、この年は2本のサヨナラ本塁打を打ち、21年連続2桁本塁打を達成し、通算サヨナラ本塁打(12本)及び通算サヨナラ安打(20本)の新記録を打ち立てた。しかし、その年の9月(対日本ハム)の試合中に、以前手術した左膝の故障が再発してしまう。膝を治すためには今までプロスポーツ選手で誰もやったことがない、難しい手術をしなければならなかった。手術が成功する可能性は低く、成功したとしても痛みが残るのは確実だったが、「あと1本ホームランを打ってから引退したい」という思いが強く、手術をすることを決めた(清原和博,2018)。手術は成功したが、リハビリはなかなか進まず、2007年のシーズンはプロ入り後初めて、一軍での試合出場がなかった。ようやくバッティング練習ができるようになったのは、手術から8ヶ月後の2008年3月であったが、手術した左膝の影響で自分の思い通りのバッティングはもうできなくなっていた。現実を突きつけられた清原は、野球人生に踏ん切りをつけなければならないと思い、その年の8月から一軍に復帰することを決め、そのシーズンでの引退を決意する(清原和博,2018)。

今までは年下の選手にバッティングについてアドバイスを求めることはなかったが、復帰後は年下の選手に自ら電話をし、教えを乞うている。いままで自分がこだわってきた打ち方を変えてでも、ホームランを打ちたいという気持ちが強かったことは以下からも理解できる。

「どんな形でも、まぐれでもいいから、あと1本、ホームランが打ちたかったんです。とにかく、残り打席でホームラン

を打つために何でもしました。苛立ちというより、『あと何試合しかない』という焦りでした。」(清原和博,2018)

しかし、その気持ちとは裏腹に、一本もホームランを打てないまま引退試合を迎え、最後の打席は空振り三振で現役を引退した。

オリックスでは怪我の影響で満足なプレーはできず、野球が出来ない辛さを痛感した3年間だったが、清原の引退試合には、日本球界で活躍したたくさんの有名選手が足を運んでいる。それだけ清原はたくさんの人に信頼され、愛されていたのである。多くの選手がこのような引退の花道を飾ることなく引退していく中で、最後にこれだけの愛情を受け取ったことを考えれば、清原の引退後の人生は、充実したものになると思われた。

#### 4-7 現役引退後

2008年に現役を引退し、その後は野球解説者やテレビのバラエティー番組などで活躍していた。私生活では、家族と過ごす時間が増え、特に息子の野球を見に行けることが嬉しかった。(清原和博,2018)しかし、このような幸せな時間を過ごしながらも、清原の心の中にはもどかしさがあったことが以下から分かる。

「野球をやめた瞬間からどこかぼっかりと心に穴が空いたような気がして、それはいまだに埋まっていないんです。急に野球がなくなって、これからどうするんだ、どこに向かうんだという戸惑いが大きかったです。」(清原和博,2018)

また、バラエティー番組では台本通りにしなければならず、周囲が想像している清原と、本当の清原とのギャップに苦しみ、ストレスを感じていたことが以下から分かる。

「乱闘で怒るシーンや、喜怒哀楽を激しく出すというのは野球の試合中の清原和博であって、やめれば一人の人間としての清原和博に戻れると思っていたら、そうではなかった。野球をやっていた頃の自分を演じているんですが、実際には野球をやっているような満足感というのはなかったです。」(清原和博,2018)

2014年に週刊文春から違法薬物使用疑惑が報じられ、その頃からテレビ出演の機会が減った。そして、2016年2月3日に覚せい剤取締法違反で逮捕され、同年5月31日に懲役2年6か月(執行猶予4年)の有罪判決が下された。保釈後は週

に1回薬物の病院に通い、薬物治療を続けており、それ以外は自宅で過ごしている。

野球から離れた後の空虚感は、家族と過ごす幸せな時間では埋めることができず、その心の穴を埋めるために覚せい剤に手を出してしまったのではないかと考えられる。引退後の清原に野球界はいかなるポスト（例えばコーチ、あるいは監督就任のオファー等）も用意していなかった。あくまで想像の域を出ないが、当時から既に清原には黒い噂があり、球界が清原との関係を継続することに躊躇したのではないだろうか。いずれにしろ、野球界から必要とされなくなった清原は、自分の人生を見失うこととなる。結局、清原にとっての野球とは、自身と社会とを繋ぐ唯一のものであったと考えられる。しかし、唯一の線を断ち切った原因もまた清原自身の中にあった。

## 第5章 イチロー選手の野球人生との比較

これまで見てきたように、清原は現役時代素晴らしい功績を残してきたものの、数々の挫折も味わい、成功だけでなく、転落も経験している。これと対照的に、イチローは既に幼少期より父親から英才教育を受けており、小学校時代は下校してから打撃と守備の基本練習を毎日繰り返していた。基本練習が終わった後には、宿題と夕食を済ませ、21時からバッティングセンターに毎日欠かさず通っていた(nishi19,2014)。高校時代は2回甲子園に出場し、その後オリックスに入団した。イチローはMLBシーズン最多安打(262安打でギネス世界記録に認定)、プロ野球における通算安打世界記録(NPB/MLB通算4257安打でギネス世界記録に認定)という輝かしい功績を残している(Guinness World Records,2016)。そして、45歳になった今も、現役選手として活躍しており、2018年にはマリナーズとスペシャルアシスタントアドバイザー(会長特別補佐)契約を結び、半永久的にマリナーズに留まることとなっている。このように、野球界で活躍し続けているイチローとそうではなかった清原との間にはどのような違いがあるのだろうか。

まず1点目は、目標設定の仕方の違いである。イチローにとって野球とは容易に達せられない人生の目標であり、この実現に向けて取り組んでいるとき、心から幸せを感じているように思われる。また、人は独自の夢を自分で設定し、その

実現をめざして挑戦し生きること輝くことができる(松本・市川,1999)。イチローは自身の夢について、「僕は野球の研究者でいたい。自分がアスリートとしてこの先どうなっていくのかというのを見てみたい。プレーしていなかったとしても、毎日鍛錬を重ねることでどうなれるのかを見てみたい。」(Number Web,2019)と述べている。イチローの「野球の研究者でいたい」という目標は、野球をやっている現役時代はもちろん、引退後も野球について探求することを可能とする。つまり、イチローの夢にはゴールが存在せず、生涯を通じて達成されることがないため、その夢に向かって目標を設定し、努力し、挑戦し続けることができる。

これに対して清原の夢は、「巨人のユニフォームを着て野球をすること」(清原和博,2018)というものであった。したがって、清原の夢は、巨人に入団したことにより達成され、この時点で人生の最終目標が無くなってしまったと考えられる。すなわち、巨人に入団するまでは、夢に向かって努力していたが、その夢が達成された後は、何のために努力すれば良いのか分からなくなり、スランプに陥ってしまったと考えられる。実際に、西武在籍時と巨人在籍時の成績を比較してみると、西武在籍時の方が平均打率や、一試合当たりの平均本塁打率などが高い(日本野球機構,2017)。

つまり、夢は具体的で容易に達成できるものではなく、やや抽象的な概念を含み、容易には達せられないものを設定することで、その最終目標の実現に向け、挑戦し続ける気力が湧いてくるのではないだろうか。もし清原が野球道を究めることを人生の最終目標とし、「巨人に入団することはその為の手段である」と考えていれば、巨人入団後も成績を伸ばすことができたのではないかと考えられる。また、引退後は指導者の立場から野球を究めることができ、生涯を通じて夢を追いかけることができたはずである。

2点目は、野球技術、特にバッティング技術に対する考え方の違いである。イチローはバッティングについて「最高の打者と言われても、10回に7回は失敗しているんですよ。まだまだ成長できます。」(MOTIV,2017)と述べている。野球界では打率3割越えのバッターは優秀だとされており、3割を目標にプレーしている選手が多い(広尾晃,2018)。しかし、イチローは3割打ったことに満足しておらず、7割の凡退について反省していることがその発言からうかがえる。

これに対して清原は、「バッティングは失敗で成り立っている。10回のうち3回ヒットを打てば、それで3割バッターなのだ。それはつまり10回のうち7回は打てないということ、確率的に言えば1試合のたとえば4打席で一度も打てないということはいくらでもある。」(清原和博,2009)と述べている。つまり清原は、3割打てることに満足し、7割の凡退は仕方がないことだと考えている。清原のような野球の才能のある選手が、一般的に優秀とされている打率3割を目標とせず、イチローのように高みを目指していれば、野球の探求者としての道が開かれたのではないだろうか。

3点目は、自己管理能力の違いである。イチローは野球選手の中では小柄で、体格に恵まれていなかったが、そのハンデを日々のトレーニングや徹底した食事管理でカバーし、ベストパフォーマンスができるように常に気を使っている。また、メンタル面においても、周りの環境に左右されず、常に同じパフォーマンスができる強靱な精神力を持っている(コーラ侍,2018)。

これに対して清原は、自身のメンタル面について、「イチローや松井というのはお客さんが1人もいなくても、同じパフォーマンスを出せるタイプの選手だと思うんです。僕は逆にファンの人たちとの一体感がないと力を発揮できなかった。感情とともに戦うというか、そういうやり方しかできなかったんです。」(清原和博,2018)と述べている。清原は周りから期待されたり、応援されたりすると大きな力を発揮できるが、逆の状況では自分の実力を発揮できない場面が多かった。すなわち清原の野球は劇場型である。また、野球以外の生活について、清原は「2年目からは遊びを覚えて、油断というか、隙というか、そういうものが出てしまいました。結局、手帳をつけたのもあの1年だけだったんです。」(清原和博,2018)と述べている。高校までは野球以外の生活も縛られていたが、プロ入り後は、それまでのような縛りが無くなったことにより自由な時間が増え、自己管理ができていなかったことが推察される。

以上をまとめると、イチローの自己管理能力は大変高く、他のプロ野球選手と比較しても人並み外れたものであった。そこまで徹底した自己管理ができるのは、それによって得られるものが自分の目標に近づくための1つのステップであることを理解していたからではないだろうか。また、野球技術、

特にバッティングで、一般的な目標を立てないのは、誰かの立てた目標ではなく、自分の目標に近づくための一つの手段であるという考えを持っていたためと思われる。つまり、人は、目標を達成したいという強い気持ちも重要であるが、それだけではなく、その目標を達成するためにはどのようなことが自分自身に必要なかを考える必要がある。

## 第6章

### 1) なぜ野球界のスターだった清原はその後転落したのか

ここで清原の挫折の要因を整理する。

まず1点目は、劇場型の野球と勝利至上主義の野球との違いである。具体的には清原にとってのセ・リーグとパ・リーグの野球の違いが挙げられる。両リーグの野球の違いについて清原は、「セ・リーグとパ・リーグの野球の違いも僕を戸惑わせた。どちらが『男対男の勝負』かといえば、それはパ・リーグの野球だと僕は思うのだ。つねにチームバッティングを優先していたつもりだが、『ここぞ』という場面では、ファンに望まれている場面では、そしてそれができる選手は、ピッチャーは全力で立ち向かってきたし、バッターは全力で打ち返した。」(清原和博,2009)と述べている。また、パ・リーグでの男対男の勝負について、「そういう対決には、結果を、たんなる勝敗を超えたロマンがあったと思う。ファンもそういう野球を求めていると僕は信じていたし、実際に喝采してくれた。とにかくそういう勝負に挑むのが、パ・リーグで僕が経験してきた野球だった。」(清原和博,2009)と語っている。清原がプロ入りから11年間やってきたパ・リーグの野球は、清原の生まれ育った岸和田の「だんじり祭り」で見っていた「男らしい大人」同士の勝負の場であったと考えられる。清原は、このような勝負が許される劇場で主役として生きていたかったのではないだろうか。

これに対して、セ・リーグの野球について清原は「パ・リーグは勝負どころほど、ありっただけの真っ直ぐで勝負してきました。でも、そういう野球はセ・リーグにはありませんでした。試合の勝敗がほとんど決まった後でも変化球、変化球、変化球できたりとか…。僕が今までやってきた野球の感覚で勝負にいったら、全部かわされました。」(清原和博,2018)と語っている。パ・リーグのピッチャーは勝負どころ、あるいは

は勝敗がほぼ決まっている場面ではストレート勝負をすることが多かったが、セ・リーグの投手はどのような場面でも、常に打者を打ち取ることを考えた配球だった。つまり、セ・リーグでは男対男のような勝負がほとんどなく、清原が勝負に燃える場面が少なかったということである。

30年以上も野球を続けることができた理由について清原は、「優勝という目標に向かって、なりふり構わず戦うのもまた野球選手として生きる喜びだった。けれど、魂と魂をぶつけるようなあの戦いがなかったら、僕はここまで野球を続けることはできなかった。その勝負の一瞬のために、僕はバッテリーボックスに立ち続けたのだ。(清原和博,2009)」と述べている。

西武在籍時は、清原のやりたい野球、求めている野球をすることができたが、巨人移籍後は、今までやってきた野球とのギャップに苦しんだ。特に、勝負どころで男対男のような真剣勝負ができなくなったことは、清原が燃え尽きてしまった最も大きな理由として理解できる。野球はチームスポーツであり、従ってチームの勝利を優先しなければならないが、打席に立てばピッチャーとバッターの対一の勝負である。この対一の勝負ができなくなったセ・リーグの野球は、清原にとって魅力のないものであったと考えられる。

2点目は、ホームランを打てなくなったことである。清原は野球を始めた時から引退するまでホームランにこだわり続けていた。清原は、野球選手として自分がやるべき仕事について、「球場を沸かせるのが自分の仕事だと思って生きてきた。世の中の人々に感動を与えること、明日も頑張ろうという気持ちになってもらうこと。それが野球選手の仕事であり、そのために自分は大きなホームランを打つのだ。」(清原和博, 2009)と述べている。

大きなホームランを打った時に浴びる、ファンからの大歓声は清原にとって、自分が求められ、認められていると感じられるものであったことは以下からもうかがえる。

「誰も見たことがないような大きな、美しいホームランを打つこと。それが僕の野球選手としてのアイデンティティだった。」(清原和博, 2009)

「バット一閃、胸の空くようなどでかいホームランを打つ。それが、大袈裟に言えば、僕が野球界に存在する意味だった。」(清原和博, 2009)

現役時代は、ホームランを打つことで、ファンからの声援を受けることができ、それが清原にとってやりがいであった。しかし、ホームランを打てなくなってからは、その声援を受けることができず、他者から求められ、認められていると実感できなくなったのではないだろうか。

3点目は、引退後も「4番のプレーヤー」から脱却できなかったことである。大半のスポーツ選手は現役を引退し、競技の第一線から退くことになる。その後は、指導者としてそのスポーツに携わったり、クラブチームなどで競技を続けたりと様々である。しかし、清原は引退後も、現役時代を忘れることができていなかったことが以下から分かる。

「僕はずっと引退した瞬間、野球選手としての清原和博は死んで、新しい人生が始まるものだと思い込んでいたのですが、バットを置いてからも、相変わらず僕はホームランを打った時の感覚を、追い求めていたんです。」(松井一晃, 2018)

清原は引退後も4番としてホームランを打ち、ファンからの大歓声に包まれる時に感じられる快感に執着し続けていたのではないだろうか。清原にとって、ファンから応援され、声援を受けることは、自分自身が求められ、認められていると感じることであったと思われる。しかし、スポーツ選手は、いずれは現役を退く時がある。その時に過去の栄光を追い求めるのではなく、第二の人生で自分が今まで培ってきた知識や経験を次の新しい世代に伝えることが、自身の第二の人生を切り開くことに繋がっていくのかもしれない。清原のように華々しく活躍しながらも、数々の挫折を経験している選手は数少ない。清原であれば、活躍している選手だけでなく、伸び悩んでいる選手の気持ちも理解でき、清原にしかできないアドバイスもできるはずである。もし、清原が指導者としての道に進んでいけば、チームや選手から求められる存在となり、現役時代に感じていたやりがいとは別のやりがいを見つけることができたのではないだろうか。

## 2) なぜ選手としての実績がその後の人生にマイナスの影響を与えたのか

清原の実績がなぜその後の人生にマイナスの影響を与えたのかについての理由として、以下の2点が考えられる。

1点目は、野球以外のことを教育する人がいなかった点である。高校を卒業して親元を離れる選手に対して、親代わり

に野球以外のことを教えるのは監督の役目であるが、清原が一年目で入団した西武の森監督(当時)は、清原に対して社会教育をしていなかったことが以下から分かる。また、巨人の王監督(当時)も同様であった。

「四月下旬の仙台遠征の際、僕ははじめて門限を破ってしまった。ふつうなら、即二軍落ちだろう。事実、首脳陣の間では『ファームで一から鍛えなおすべきだ』との意見が多数を占めたそうだ。けれども、森祇昌監督は首を縦に振らなかった。『いまはゴールデンウィークだ。鳴り物入りで入った清原を見たいと思うファンもいるはずだ。そのとき、清原がいなかったらどう思うだろうか。もう少し待ってくれ。』」(清原和博,2009)

「巨人時代、コーチ陣が清原を持て余して、2軍で巨人軍というのは何かというのを教えなくちゃいけないと、コーチらで全員一致になった。だけど、長嶋(茂雄・元巨人監督)さんが『三顧の礼を尽くして来ていただいた清原をそういうところにおいてはいけない』と言って、ずっと使い続けた。それでダメになった。」(広岡達郎,2016)

コーチ陣からは、「清原を教育しなければならないのでは？」という意見が出ており、これを監督に伝えていたが、森監督(当時)も王監督(当時)もこれを否定している(清原和博,2009)。高校時代からK・Kコンビとして有名であった清原は、スター性があり、清原を見に来ているファンが多かった。また、高卒ルーキーながら優秀な成績で、チームにとって清原は大きな戦力だったため、レギュラーから外せなかった。清原はスター性があり、野球の才能に恵まれすぎたため、清原に対して意見できる人がいなかったのではないだろうか。

2点目は、野球一筋の人生を送ってきた清原にとって、野球と同じくらいやりがいのあるものがなかった点である。つまり、野球中心の人生を過ごしていた清原にとって、野球とは、他の人の想像を絶するほど大きなものであったのではないだろうか。引退後は野球解説者として、野球関連の仕事をしてきたが、野球と繋がっていたと思う清原の気持ちとは逆に、扱いにくい清原のことを遠ざけようとする関係者がいた(野村克也,2016)。その結果、野球関連の仕事はなくなり、野球のない生活について以下のように述べている。

「僕は『野球で死んでもいい』と思うくらい命を懸けてやっ

てました。でも、いま思えば、野球での苦しみなんか、たいしたことなくて、どんな状況でも野球をやっていることが幸せであって、終わってからの苦しみの方が遥かにつらかったですね…。」(Number.930,清原和博「告白」,p.14)

引退後は、野球で空いた心の穴を埋めることができず、その穴を埋めるために覚せい剤に手を出してしまった。

清原は小学校3年生で野球に出会ってから33年間という、人生の半分以上を野球に捧げてきた。その長い年月を過ごしているうちに、清原の中で野球の存在は何物にも代えることのできないものになっていたのではないだろうか。それほど野球を愛し、清原ほどの素晴らしい成績を残している選手であれば、指導者としてどこかから声がかかるはずだが、そうではなかったことが以下からうかがえる。

「そもそも、僕にはどこの球団からも声がかかりませんでした。西武、巨人、オリックスと3つの球団でプレーしましたが、OBとして球団イベントに呼ばれることもなかったと思いますし、現場にいたいという自分の思いとは逆に、野球界との関りはどんどん薄くなっていきました。」(清原和博,2018)

どこの球団からも指導者のオファーがなかったのは、清原の競技者としての能力ではなく、人間力にその原因があったのではないだろうか。結局、引退後は指導者としての道はなく、野球と繋がっていたいという清原の気持ちとは逆に野球と離れていくことになる。現役時代は野球をすることで充実感があったが、引退後は野球と徐々に離されてしまい、フラストレーションが溜まった状態であった。もし、この時に清原の周りに支えとなる人間がいれば、覚せい剤に頼らずに済んだかもしれない。また、指導者としての道があれば、引退後も野球と繋がることはでき、引退後に感じていた空虚感をこれほど感じることなく、逆に指導者として野球界に貢献することができていたかもしれない。

## 第7章 まとめ

本研究では、清原の生涯を詳細に検討することを通じて、自身がスポーツとどのように向き合うかを検討した。これまでの私の生活の中心は、部活動としてのバレーボールであり、チームが勝つことを目標にしてきた。しかし、来年からは社会人となり、新たな目標を立てる必要がある。その目標を立

てる際には、イチローのようにバレーボールを通じて人間力が高められる目標とし、そのために何をしなければならないかということを考えていきたいと思う。スポーツである以上、チームの勝利にこだわり、これによって周りから評価されることは重要であるが、これが行き過ぎると清原のように劇場型の競技人生を追い求めてしまう可能性がある。私は卒業とともに学生バレーの競技者を引退するが、これまでバレーボールをこのように捉え熟考したことはなかった。また最後の学生リーグが終わったのち、燃え尽きた感があったのも事実である。しかし、これまで学生時代を通じて多くの時間を費やしてきた競技であるからこそ、今後の自身の人生に繋げる必要がある。これが本研究の結論である。

これからは、バレーボールを通じて自身がこれまで培った知識や経験を伝え、少しでも貢献できればと考えている。来年から社会人となり、新たな環境での生活がスタートするが、スポーツを通して学んだことを十分に生かしていきたい。

## 第8章 参考文献

- ・清原和博(2018)“告白”文藝春秋
- ・清原和博(2009)“男道”幻冬舎
- ・松井一晃(2018)“Number 930 ～清原和博「告白」～”文藝春秋
- ・清原和博(2009)“反骨心”角川文庫
- ・松井一晃(2018)“文藝春秋 第九十六巻 第九号”文藝春秋
- ・MOTIV(2017)“イチロー：モチベーションの上がる名言121選”  
[motiv.top/word/ichiro/](http://motiv.top/word/ichiro/) (最終閲覧日 1月 18日)
- ・日刊ゲンダイ(2015)“KK ドラフトのシナリオは二頭取だった”  
<https://www.nikkan-gendai.com/articles/view/sports/16036>  
2 (最終閲覧日 1月 12日)
- ・週刊朝日(2016)“元西武ライオンズ監督・広岡達郎 清原逮捕に「この件は球界に対する警告。指導者が常識教えなかった」”  
<https://dot.asahi.com/wa/2016021000099.html?page=1>  
(最終閲覧日 1月 12日)
- ・週刊朝日(2016)“野村克也 清原逮捕に「天才だが考えられないバカ。野球人としての復帰は難しい””  
<https://dot.asahi.com/wa/2016020900178.html?page=1>  
(最終閲覧日 1月 12日)
- ・Number Web(2019)“イチローが迎えるメジャー19年目。初のマイナー契約も泰然と構える。”  
[https://www.msn.com/ja-jp/sports/mlb/イチローが迎えるメジャー19年目。初のマイナー契約も泰然と構える。/\\_ar-BBSKJtt?ocid=spartanntp](https://www.msn.com/ja-jp/sports/mlb/イチローが迎えるメジャー19年目。初のマイナー契約も泰然と構える。/_ar-BBSKJtt?ocid=spartanntp) (最終閲覧日 1月 27日)
- ・日本野球機構(2017)“清原和博(オリックス・バファローズ)|個人別年度成績”  
<http://npb.jp/bis/players/41343862.html> (最終閲覧日 1月 27日)
- ・松本元・市川道教(1999)「脳を創る—第4回 人が輝いて生きるとき」理科学研究所 脳科学総合研究センター ブレインウェイ(脳道)グループ
- ・コーラ侍(2018)“何故イチロー選手は凄いのか。プロアスリートが思う「イチロー選手の真の凄さ」”  
<https://cola-samurai.hatenablog.com/entry/ichiro> (最終閲覧日 1月 31日)
- ・nishi19(2014)“天才の育て方—イチローはどのように育てられたのか—”  
<http://www.nishi19-bn.com/genius-growing-ichiro/> (最終閲覧日 1月 31日)
- ・Guinness World Records(2016)“米大リーグ、イチロー選手「プロ野球での通算最多安打数」で世界記録!! |ギネス世界

記録”

[www.guinnessworldrecords.jp/news/2016/6/most-base-hits-in-career-professional-baseball-ichiro](http://www.guinnessworldrecords.jp/news/2016/6/most-base-hits-in-career-professional-baseball-ichiro) (最終閲覧日 2 月 11 日)

・ 広尾晃(2018) “【3 割打者を考える(3)】「3 割打者は優秀」は人為的に維持されてきた?”

<https://news.goo.ne.jp/article/fullcount/sports/fullcount-100508.html> (最終閲覧日 2 月 11 日)